

# 牛久：学校周辺に見る自然

第53号 ひたち野うしく小（ひたち野西近隣公園）

2011年11月14日発行

＜ 秋の水辺公園、生きものたちの冬越し準備 ～3. 動物に食べられて種子を運ばせる植物 ＞

11/8、ひたち野うしく小4年生との水辺公園、秋の生きもの観察。今回は、赤や青、紫など、きれいな色をした果実で鳥などの目を引きつけ、食べられることで種子を運ばせる植物たちです。



まずは、赤い実から。左は、公園に行く途中の街路樹で、モッコク（ツバキ科）です。赤い果実が裂けて、朱色の種子が顔を出していました。多くの昆虫は赤が分かりませんが、鳥は色彩感覚豊かで、赤はとても目だって見えるようです。植えた覚えがないのに、いつの間にか庭に育っていたなんて木があったら、それは鳥などが食べて運んだ種子から芽生えたものかもしれません。

↑ 赤い果実が裂け、朱色の種子が顔を出したモッコク（ツバキ科）。昆虫には分からない赤が、鳥にはくっきり見える。



こちらは、ハナミズキ（ミズキ科）。真っ赤に熟して、いかにもおいしそうですが、食べると苦いそうです。それでもヒヨドリなどの鳥は食べているようです。仲間のヤマボウシは、私たちが食べても甘くておいしいですが、公園内に植えられていたのは、今年実をつけませんでした。鳥はこれらの果実を食べると、別の場所で糞をし、肥料たっぷりの状態で種まきされることになるのです。

← 真っ赤に熟したハナミズキ（ミズキ科）紅葉も美しい



きれいな青い実を、見つけてくれた子もいましたね。青い果肉のように見えるのは、じつはイシミカワ（タデ科）の花びら（正しくは「花被：かひ」）で、花が咲き終わっても残っていて、中にある本当の果実が熟すころ、青く色づいて、鳥たちの目をひくようです。本当の果実は黒く、白い突起があり、落ちるとアリをひきつけるのだそうです。鳥だけでなく、アリにも運んでもらえるのです。この公園内にはあまり多くは見られませんが、さすが皆さん、観察の目がきたえられてきたのでしょうか。また、おおぜいで探すと、いろいろなものが見つかりますね。手にとって見せてくれたお友だちも、うれしそうです（後ろにぼんやり写っているのは、その子の笑顔）。

← タデ科のイシミカワ。青い果肉のように見えるのは、花びら（花被：かひ）で、その中に黒くて白い突起のある本当の果実が入っている。



こちらは、コムラサキ（クマツヅラ科）。  
牛久市内の雑木林には、仲間のムラサキシキブぞうきばやしがみられますが、こちらはそれに近い仲間  
で、公園などによく植えられています。園芸  
やさんで「ムラサキシキブ」として売っているのも、大部分はこのコムラサキのようです。  
ムラサキシキブと違って、果実の集まり（果序：かじよ）が、葉のつけ根から少しはなれたところから出るのが特徴ちがつてです。それにしても、紫の宝石のようにきれいですね。  
とくちょう

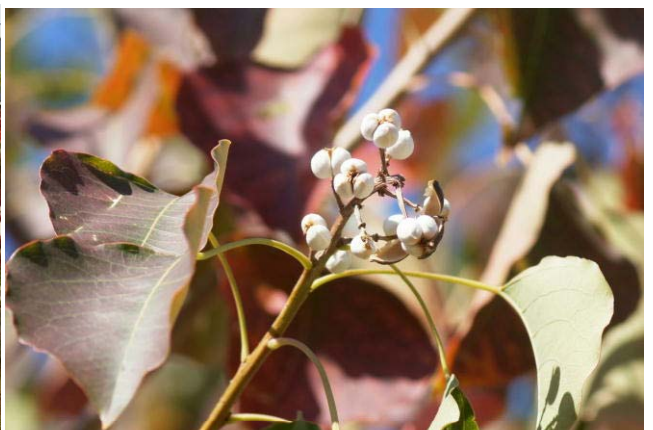
↑ 宝石のように、紫に輝く果実が鳥たちを引きつけるコムラサキ（クマツヅラ科）。



こちらのエゴノキ（エゴノキ科）の果実は、  
色あざやかではありませんね。目立たない  
褐色で、炒ったコーヒー豆のようです。し  
かもサポニンという殺虫成分が含まれてい  
て、かむとえごい（苦い：エゴノキの名の由  
来）です。下に落ちてると、スダジイのど  
んぐりと間違えられることもあります。それ  
でも、この実も鳥が運ぶのです。ただし、あ  
いてはヤマガラ1種のみ。秋になると皮が  
ぬげ、茶色の種子がむき出しでぶら下がり、  
ナッツの好きなヤマガラを誘うのです。次回

↑ 茶色の種子をぶら下げて、ナッツの好きなヤマガラを誘うエゴノキ。殺虫成分を含む皮は、脱げ落ちている。

予定のどんぐりの仲間と同じで、ヤマガラは種子を食べる一方、冬に備えてか、一粒ずつ土に埋めてたくわえます。そして、その食べ残しやかくし忘れが春に芽生えて新しい仲間となるのです。目立たないのは、ただ食べるだけの、他の鳥たちに食べられるのを防ぐはたらきもあるのかもしれませんがね。



↑ 紅葉の進んだナンキンハゼ（左）と、むき出しになった白い種子（右：本当の種子はその中にあり黒い）。

最後は、学校のフェンスの外側に並んでいるナンキンハゼ（トウダイグサ科）。だいぶ紅葉も進んできました。まだ緑色をした実もありますが、熟して果実の皮が裂け落ち、白い種子がむき出しになって、鳥たちを誘っているものも多く見られます。この白いのは、じつは仮種皮（かしゅひ）と呼ばれる  
付属物ふぞくぶつで、その中にある本当の種子は黒くてかたいです。白い仮種皮は「ろう」でできていて、鳥たちにとっては、えさの少ない冬場のカロリー源として役立っているようです。 【理科支援員 宮内】